

## 地域協働と担い手育成(3)

### ～多世代協働の観点から～

大藤文夫\*・鶴岡和幸\*\*・栗川隆宏\*\*\*

Local Collaboration and Upbringing of the Subject(3)  
～From the viewpoint of many generations collaboration～

Fumio OOTOU\*・Kazuyuki TURUOKA\*\*・Takahiro KURIKAWA \*\*\*

本稿は、平成 26 年度の呉市 S 地区における地区まちづくり計画の見直し作業に、アクションリサーチとして参加したことで得られた知見を報告するものである。

見直し作業の中で確認された課題は、担い手が高齢化しており、次世代の担い手を育成すること、つまり多世代協働の仕組みづくりの必要性であった。伝統的な地域社会では、地域の人材（地域人）を育てる広い意味での教育システムがあった。人が子どもの時期から成長するに応じて、集落の相応の役割を担うことで集落は維持・管理されてきた。またそのことが人が地域人として成長するプロセスでもあった。担い手不足が顕在化している今だからこそ、それに類した育成の仕組みが求められる。このような、まちづくりにおける役割を担うことを通して人が育つという考え方は、「正統的周辺参加論」や「子どもたちの参画のはしご」論の考えと重なる。いま求められている担い手育成も、このような学習観を必要にしているといえよう。

S 地区の見直し作業では、①多世代協働の事業、②参加しやすい方法、③中学生、中学校、PTA との連携という方向性がだされた。地域協働はまちづくりのメインストリームであるが、担い手育成は多くの取り組みが逢着している課題である。S 地区の取り組みは解決の一つの方向を示していると考えられる。

#### まちづくり，多世代協働，正統的周辺参加論，子どもの参画

##### 1. はじめに

地域協働と担い手育成に関して、呉市 S 地区における地区まちづくり計画策定を事例に検討したことがある<sup>1)</sup>。そこではワークショップ手法に着目して、担い手が育成される論理を示した。S 地区まちづくり委員会は計画策定から 5 年の実践を経て、平成 26 年度に

---

\*, \*\*, \*\*\*広島文化学園大学 社会情報学部

Faculty of Social information Science, Hiroshima Bunka Gakuen University

### 地域協働と担い手育成（3）

計画の見直し作業に取りかかった。今回もその作業に大藤研究室として協力することになり、アクションリサーチを行うことにした。本稿ではその作業から得られた知見を報告する。なお本研究は 2014 年度呉地域オープンカレッジネットワークの地域活性化研究に選定されたものである。

見直し作業は、計画改定部会が主導し、計 12 回の同部会、まちづくり報告会、計 4 回のワークショップを通して行われた。まず計画改定部会メンバーで事業評価活動を行い、後掲の「活動評価ダイジェスト版」を作成した。報告会はそれを用いて行い、同日の報告会終了後にワークショップをスタートさせた。報告会からは意図的に P T A の役員、中学生に声をかけ、参加してもらうようにした。ワークショップは冒頭にアイスブレイクを行い、小グループに分かれて、基本的にはどういう活動に参加したいか、どうすれば活動に参加しやすくなるかという観点から作業を行った。

アクションリサーチはこのスケジュールに合わせ、次のような方法で行った。

- ①地区まちづくり計画見直し作業の参与観察及び参加者への聴き取り。
  - ②地区住民の一部（大人と中学生・高校生・大学生）を対象としたアンケート調査。
- また次のような係わりをした。
- ①計画改定部会の会議、報告会、ワークショップに参加した。
  - ②研究室所属学生が地区行事に参加した。
  - ③アンケート調査結果を委員会で紹介し、計画の見直しの参考にしてもらった。

## 2. 計画見直しの背景～呉市及び S 地区の地域協働の取り組み

呉市は市民協働の施策展開の中で、①コミュニティの自立経営（地域力の向上）、②小さな市役所の実現（協働型自治体への移行）を目標に、【ゆめづくり地域協働プログラム】を動かしている。このプログラムの中で 28 地区（連合自治会の範囲あるいは旧合併町）の協働のまちづくり活動が展開している。

呉市の地域協働の取り組みは、広島県内でも有数のものである。しかし現在の大きな課題の一つは、まちづくりの担い手育成である。担い手不足には人口減少・高齢化による物理的な担い手不足と、人口流動化によるココロの担い手不足（担い手候補はいるのに、それが活動に向かわない）がある。S 地区は丘の上の高齢化、人口減少と同時に、平地部での転入（マンション）がなされている。その点で、S 地区はココロの担い手不足をどう解決するのかを検討する一つの事例になる。

その S 地区は、平成 21 年度に地区まちづくり計画を作成した。取り組みの特徴は、計画づくりの中で担い手を発掘・育成しようとした点である。まず組織体の構成である。まちづくり委員会の役職・委員（平成 21 年度当時）は、いわゆる自治会を中心とした年齢・属性別組織、行政協力組織を母体としており、まちづくり委員会はそれらの連合体といえる。このような包括的な形で組織していくことは、呉市全体の方針であり、そこにはまちづくりは総合的・包括的に行うという考えがある。

次に計画づくりのメンバーを公募したことがある。これらのメンバーを含めて計画策定部会がつくられた。公募という方法によって既に表舞台に出ている担い手だけでなく、潜在的な担い手も発掘できたことになる。これらのメンバーはいまでは事業推進部会メンバーとして、また各地域団体で活躍するようになっている。

まちづくり委員会の活動には独自事業もあるが、各団体への支援事業が多い。サービスの隙間を埋める、また各団体の手伝いという性格の活動である。よってまちづくり委員会が各団体を統括しているというより、事業推進部会メンバーが媒介役となり、各団体の緩やかな連合が成り立っているという状態である。今回の見直し作業も事業推進部会が計画改定部会として中心となっていて行っている。こういった制度的な仕掛けによって、いわば活動者がヨコにつながる可能性ができたことになる。

最後に技法上の工夫である。ワークショップを行い、担い手の主体化を図っている。まち歩きの体験で感じることから始まり、KJ法による交通整理、委員会の議論での理論化、そして実践へと主体化を促す仕掛けをした。

このように制度上、また技法上の工夫によって担い手が育成されていった。その後、5年経った平成26年度に計画の見直し作業を行った。表1のように、個々の事業の評価がされたうえで、課題③でとくに注目されるのは、「学校との連携不足」、「後継者をつくる」、「小中学校と合同で」、「子どもが主役のイベント」、「子供の参加が少ない」、「若い世代に引き継がれていかない」といった、若い世代の参加、後継者づくりである。担い手は育成されたが、それが自分たちと同世代にとどまっている点である。つまり多世代協働が課題となっている。

表1 活動評価ダイジェスト版

| 振興方針                         | 活動内容                 | ①事業報告<br>(行ったこと。つくったもの。回数。参加者)                                       | ②成果の評価<br>(目標が達成できたか。もしそれをしていなかったら、どうなっていたか)  | ③課題  |
|------------------------------|----------------------|--|---|--|
| ふれ愛たすけ愛<br>happyな町へ          | 4 地域の人が小・中学生に授業を行った。 | ・H22～24 語り部事業を実施した。<br>・けん玉教室の実施。                                    | ・中学生が昔の三条の様子について、また戦争中の様子について知る機会になった。<br>・地域のひとと子どもたちの交流が深まった。→子どもたちが犯罪に巻き込まれにくい地域になる。 | ・継続できていない。<br>・ <b>学校との連携不足</b><br>(まちづくり委員会としては学校の様子を把握できていない)。 |
|                              | 5 健康づくり運動を行った。       | ・ウォーキング大会(年2～3回)<br>・体力測定。<br>・健康講演会の実施。<br>・八畳岩登山。                  | ・健康づくりだけでなく、参加者の交流の場になっている。   | ・参加者の固定化・高齢化。<br>・みんなが参加しやすい日時設定ができていない。                         |
| みんなで<br>つくろう！<br>手づくりの<br>町へ | 3 道路等の幅を拡げてもらう取り組み。  | ・住民の生活道を確保し利便性を高めるため、道路拡幅を呉市に要望した。<br>◆七曲り入口付近道路<br>◆かもめ橋の歩行者用道路(北側) | ・今年度、かもめ橋の歩行者道路(北側)拡幅工事の実施計画ができる。   | ・特定の人にまかせきりになっており、地域全体の課題として共有化できていない。                           |
|                              | 4 手動式ポンプを設置した。       | ・H19 2基 設置。<br>・H20～23 4基 設置。  | ・いざというときの水源になっている。<br>・打ち水として利用している。  | ・メンテナンスをどうしていくかを考えておく必要がある。                                      |
|                              | 5 活動拠点の整備を行った。       | ・H24.9 ふれあい広場オープン。   | ・活動や人が見えやすくなった。   | ・イベントをするには手狭なので、拡張していきたい。<br>・ <b>後継者をつくる。</b>                   |

地域協働と担い手育成 (3)

|  |  |   |   |   |
|--|--|---|---|---|
| みんなで<br>つくろう！<br>手づくりの<br>町へ                   | 6 三条コミュニティ道路の環境整備を行う。                  | ・アーケード整備や一方通行の表示などをしてもらうように、自治会として商店街の店主や呉市に働きかけた。                                    | ・歩行者が危険と思われる箇所のアーケードが取り払われたり、改修されたりした。                        |   |
|  | 7 河川敷の清掃を行う。                           | ・二河川河川敷の清掃を毎年2～3回実施している(日赤・地域)。<br>・お花見シーズンの前も清掃活動を実施。                                | ・二河川河川敷がきれいに維持・管理されている。                                       | ・清掃後のゴミの始末が大変である。<br>・とげのある木の成長が早く、清掃時に危険である。   |
| みんなが<br>つながる<br>ほっと安<br>心な町へ                   | 1 防犯灯を設置する。                            | ・地域内の夜道の状況をチェックし防犯灯の必要箇所などを確認。必要箇所には順次設置した。<br>・H21(2009. 11. 25)歩いてチェック。             | ・暗くて歩きにくかったところが改善されたと、喜ばれた。<br>・自治会で順次増設。                     | ・各自治会に引き継いでもらうこと(定期的に町内をパトロールしながら防犯灯の点検調査を継続する)。  |
|  | 2 安全マップを作成する。                          | ・H22. 7～H23. 3 地域内を点検して交通、災害時、防犯上の危険箇所を確認し、マップをつくり、各家庭に配布。                            | ・マップ完成(H23.3 全戸配布)。<br>・マップを元に図上訓練を数回実施。<br>・各自治会から好評を得ている。   | ・定期的に再調査し、見直す。<br>・マップ図上訓練の継続(マップの活用継続)。<br>・その際には子どもと一緒にやりたい(学校との連携)。                                |
|  | 4 地域内の各種行事に参加する。                       | ・地域内各種団体が実施する事業・行事に、まちづくりメンバーが参加した。<br>・エクスプレス(情報紙)で行事の周知。                            | ・以前より参加者が(多少)増えた。   | ・できるだけ参加者(特に若者)が増えるよう、継続して取り組む。   |
|  | 6 災害避難時の対応等について、検討・提案する。               | ・自主防災組織の活動強化、充実に取り組んだ。<br>・安全マップを作成した。  | ・自主防災組織の活動が強化充実された。<br>・防災訓練の参加者が増加(子ども)。                     | ・避難所のあり方や運営について、それぞれが気づいたこと(足りないと思ったこと)などの情報を共有する、また改善すること。<br>・小中学校と合同で防災訓練をする。<br>・災害時の具体的な避難方法の検討。 |
|  |  |   |   |   |
| ほめる<br>しかる<br>これぞ愛<br>大人と子<br>どもの<br>交流の町<br>へ | 2 敬老会の見直しを行う。                          | ・地域の今昔写真を展示(好評)。<br>・昔のDVDを流した。<br>・わたがし提供。   | ・自然なお手伝いが、楽しんでもできるようになったと思う。<br>・写真展は参加者から好評。                 | ・新たな企画を提供できるよう、検討していきたい。<br>・継続していくこと。  |
|  | 3 学生と他世代の交流の場を設ける。                     | ・基本計画策定の際に、子どもと一緒にワークショップに取り組んだ。  | ・まちづくり委員会に、ワークショップの参加者(中学生)が引き続き参加したが、その後、提案できるような事業が見当らなかった。 | ・子どもが関われるよう、新たなきっかけづくり。   |
|  | 4 子どもが主役のイベントを開催する。                    | ・「子どもまつり」(5月)や「みこし祭り」(秋祭り、11月)の手伝いなど、既存事業のサポートから始まった。<br>・きっかけづくりとして、わたがし機、かき氷機を購入した。 | ・2年前に「ふれあい広場」ができ、そこを拠点に更に手伝えるようになった。                          | ・子どもが主役のイベントの意味をまちづくり委員会で共有すること。  |
|  | 5 子ども祭り(5月5日に両城小学校で開催する)。              | ・サポートから始めた(2014. 5. 5、およそ160名が参加)。  | ・とくに、子どもたちのことを「よその子」から「自分の地域の孫」と思えるようになったことが、うれしい。            | ・継続してサポートしていく。  |
|  | 7 七夕まつり。                               | ・毎年、実施(地域の子ども・世話人が参加)。  | ・子どもも大人も楽しんでいる。   | ・後継者をつくること(お世話する人を育成する)。  |
|  | 8 敬老会。                                 | ・毎年、実施。   | ・2に同じ   | ・2に同じ   |
|  |  |   |   |   |
| Welcom<br>e!<br>歴史再発<br>見<br>階段の町<br>へ         | 1 地域のお宝マップを作成する(案内看板にするか)。             | ・お宝マップについては、今年度やる予定。<br>・観光情報ボックスの設置。   | ・観光客には好評。   | ・マップが案内看板。<br>・100階段にもスポットを当てる。   |
|  | 3 両城・三条地区の昔話、語り部の会を実施するボランティアガイドを養成する。 | ・ボランティアガイドを養成した。<br>・H22～24 語り部事業実施(3回)。  | ・2名 ボランティアガイド誕生。<br>・高齢者は懐かしんでくれる。                            | ・子どもの参加が少ない。→学校の協力を仰ぐ。<br>・若い世代に引き継がれていかない。<br>→若いガイドを養成したい。  |

|  |                    |  |  |   |
|--|--------------------|--|--|---|
| Welcom<br>e!<br>歴史再発<br>見<br>階段の町<br>へ | 4 地域のお宝の維持保存活動を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・200階段、八畳岩への誘導案内表示板の設置。</li> <li>・毎月発行する地区内情報紙(エクスプレス)での紹介。</li> <li>・登山道の整備。</li> <li>・草刈り。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・地区内住民への周知。</li> <li>・観光客が増えている。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・総合観光・名所・地域情報案内板の設置。</li> <li>・地域のお宝マップの作成。</li> <li>・200階段の手摺りの補修。</li> </ul> |
|--|--------------------|--|--|---|

### 3. 若者世代の地域活動への参加～担い手育成の類型

ではどのようにすれば担い手は育つのだろうか。ここで改めて担い手育成の方法について考えておきたい。地域活動の担い手は、活動への参加をとおして育つ（育てられる）というのが本来の姿であろう。レイヴとウェンガーの正統的周辺参加論<sup>2)</sup>によれば、学習とは、実践共同体における役割を担う（参加する）ことであり、正規の（正統な）メンバーとして周辺の参加から、十全的な参加へとステップアップするなかで、学習は進化する。このような学習をとおして人は成長し、また実践共同体は維持・発展・変更される。

レイヴとウェンガーが取り上げている実践共同体は産婆、仕立屋、海軍の操舵手などの徒弟制であり、必ずしも本稿が取り上げている地域社会ではない。彼らを取り上げている事例は、むしろアソシエーションに属するものである。しかし共に同じ地域に暮らすという条件がある限り、地域社会もまた一つの共同体である。そして共に幸せに暮らすことができる地域社会をつくろう（まちづくり）とする実践共同体である。活発に活動する様々なアソシエーションを育てながらも、それらをつなげてくことが今の地域社会には必要である。

そして住民の観客化がみられる現状でこそ、そのことが強調されるべきであろう。住民はすべて地域社会の正規メンバーである。住民はまちづくりに係る資源にアクセスする（学習する）権利をもつ。そして参加をとおして地域人としての自覚を身につける。

また子どもの権利条約にあるように、子どももまた参加の権利（まちづくりに係る決定、実行に参加する権利）をもつ地域社会の正規のメンバーとみなすべきである。ハートの「子どもたちの参画のはしご」論<sup>3)</sup>では、参画（子どもの参画）を積極的にまちづくり（あるいは環境問題）と結びつけている。

そしてハートは参画について次の八つの段階を区別している。①操り参画。②お飾り参画。③形だけの参画。④子どもは仕事を割り当てられているが、情報は与えられている。⑤子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる。⑥大人がしかけ、子どもと一緒に決定する。⑦子どもが主体的に取りかかり、子どもが指揮する。⑧子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する。①から③までは非参画であり、④から⑧が参画の段階である。

この参画の段階論に、周辺の参加から十全的な参加へのステップアップを読み込むこともできるであろう。そして参画の要点に大人（先行者）の側の働きかけを対応させると、情報を得ること―情報を与えること、意見を述べること―意見を求めること、一緒に決定すること―一緒に決定すること、指揮すること―見守ること、主体的に取りかかること―



緒に取りかかることとなる。大人は子どもの参画を進めるには、このような係わりが必要である。

結局、両者が言っていることは、まちづくりの担い手は最初からいるのではなく、育っていくものだということである。よってまちづくりへの参加こそが担い手育成の方法ということになる。ここから担い手育成の方法について、二つの手掛かりが引き出せる。一つは育成する技法があるのではないかということである。二つ目はヨコとタテの初心者と先行者（古参者）との関係があつてこそ技法も生きてくるのではないかということである。地域活動の初心者には、リーダーという先行者がいて、子ども・若者には大人という先行者がいる。このようにヨコにもタテにもつなげていくことで担い手の育成は可能である。始まりは地域デビューという形からの参加、子どもとしての参加かもしれない。地域社会を管轄する団体は、そのような学習の機会を積極的につくりだすことが義務でもある。担い手育成の技法については別稿<sup>4)</sup>にて検討したので、以下では、初心者と先行者の関係づくりに絞って検討していく。

現在の地域社会には、住民の地域活動に係るものとして、地縁集団、年齢・属性別集団、機能別行政協力集団、生涯学習集団、ボランティア・NPOなど様々にある。それぞれにおいて、参加＝学習の実践が相応に行われているとみなしてよいかもしれない。次に地域社会全体として、このヨコとタテの関係の点から、どのように担い手づくりが変化したのかを、3つのモデルを提示して概略的に説明する。

### (1) 伝統モデル

まず伝統モデルである。ヨコとタテの強いつながりがあつた時代のモデルである。人口の流動化が少なく、強い集落や地域社会があつた。互助、共同といったもののなかで生活が営まれていった。また地域人としての資質を身につけるための地域社会での教育があつた。図1にあるように年齢集団を通して人の一生が決まっていた。担い手育成という点では、それぞれの年齢には期待される役割があり、年齢集団のなかで役割を取得した。地域の中で同年齢ごとのヨコのつながりができ、一生の縁がつくられ、地域として人材が再生産されていた。

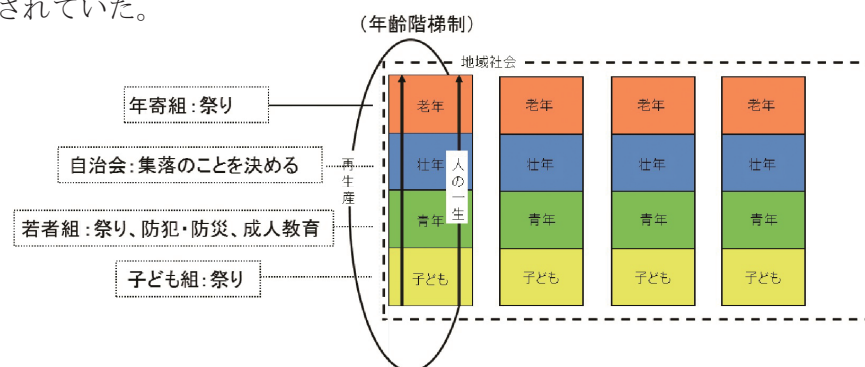


図1 個人の集団所属（伝統モデル）

## (2)高度成長モデル

しかし高度成長とともに、全般的に集落や地域社会が弱くなっていく。いまでも類似の年齢集団はあるが、個人の人生の中でもそれぞれが切り離され、地域社会でヨコとタテに統合される側面は弱くなっている（図2参照）。地域社会がバーチャルなものになってしま

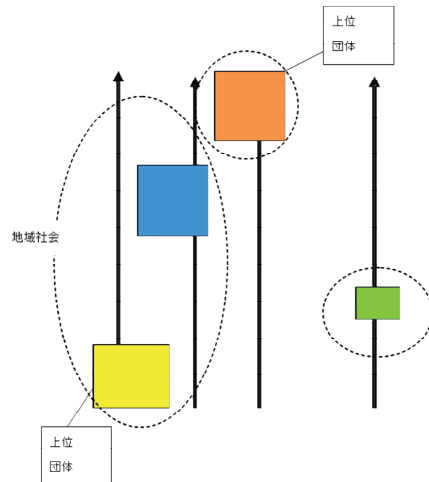


図2 個人の集団所属（成長モデル）

ったともいえる。よって地域社会として人材は育成しにくくなる。逆に行政が守備範囲を広げ、行政の担当部署が行政協力組織を育成し、自治会も部や担当として協力を引き受けていく。いわゆる縦割りの運営も生じる。しかし地域活動の担い手が減少・高齢化し、担い手育成が大きな課題となっていく。また行政が引き上げていくと、住民ニーズが満たされない隙間が生まれる。

## (3)地域協働モデル

こういったつながりが薄れた状況で提唱されたのが、地域協働である。地域協働モデルは実現されたとはまだ言い難い。理想として描けば図3のようになる。ばらばらになった

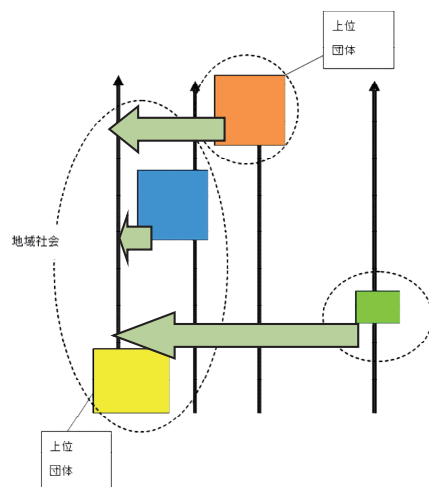


図3 個人の集団所属（地域協働モデル）

各人の活動をもう一度つなぎ直し、地域社会の中に埋めなおすことである。地域協働とは、このようにヨコとタテのつながりにおいてまちづくりを行っていくことである。とくにタテのつながりをとらえたものが、多世代協働といえるだろう。上述のように、S地区の地区まちづくり計画の見直し作業の中で明らかになったことは、この多世代協働の必要性であった。関係者へのインタビューからも、S地区内の地域団体の主たる活動者が高齢化している事実がわかった。活動者と下の世代とのタテのつ

ながりは大きな地域課題である。そのためには空白を埋めるつながりをつくる戦略的な場を定める必要があろう。

他都市の事例<sup>5)</sup>を参考にすれば、多世代協働の現実的な可能性としては次のものが考えられる。子ども・青少年の立場からは、①活動に参加しながら、年齢が上の者を自らのロールモデルとして意識し、育っていくことである。大人の立場からは、②地区にある子ども、青少年育成関連団体の役員が自分や子どものライフステージに合わせて順次繰り上が

って役割を継承していくことである。子ども育成団体を卒業した後は、自治会等で活躍し、後援していくというつながりである。そして①、②が同じ場で重なって行われることもあるだろう。多世代協働はとりあえずはこのような方向性をもつものとしてとらえておきたい。

4. S地区の現状

(1)若者世代の係り

ではS地区における住民の地域社会への係わりの現状はどうなのだろうか。S地区の二つの自治会を対象に行ったアンケート調査<sup>6)</sup>の結果からみしてみる。まず若者世代についてである。若者世代（中学生・高校生・大学生）の回答者は少数（20名）であるが、一つの傾向を読み取ることにする。

表2のように、全ての者がこれまでに何らかの地区行事に参加したことがあるが、だんだんと地域から疎遠になっていく姿が浮かび上がる。ただしまちづくりへの関心や、行事の企画・運営の参加志向などについては半数以上がもっており、参加のための条件をどのようなにつくっていくかが重要となる。

表2 行事・活動参加(若者)

| 項目             | 人数 |
|----------------|----|
| これまでの地区行事参加あり  | 20 |
| 企画・運営に参加あり     | 7  |
| この一年間で参加したものなし | 12 |
| まちづくりへの関心あり    | 12 |
| 企画・運営に参加の志向    | 11 |
| 部会参加の志向あり      | 11 |

ところで、地域の大人と接点をもつことが子ども・青少年にとって重要であることの指摘は多い。世代間交流が養護性（人を守る、いたわる）<sup>7)</sup>を育む。また「地域づくり活動によって若者たちは、多くの大人たちに出会い、自己成長と社会力（社会にかかわる力）形成の機会を得る」<sup>8)</sup>。「子どもが育つ地域社会を蘇生させるには、[中略]地域の高齢者、子育て世代、そして子どもが、共通の場で出会い、

交流し、支え合うという具体の生活の豊かさがどうしても必要」<sup>9)</sup>といった指摘などである。交流から支え合いへの発展も望まれるという点からは、観客として行事に参加し、楽しむだけでなく、楽しませることを楽しむといった行動も求められる。それも成長であろう。この点では、まちづくり委員会に係る行事の企画・運営への参加志向、まちづくり委員会の部会への参加志向をもつ若者世代がいることが注目されてよい（表2参照）。

これらの点に係る事例として、神社の祭礼の指導を挙げておきたい。S地区では一時途絶えていた神社の祭礼を、子ども祭として復活させた。小学校から笛、太鼓、巫女、獅子、剣士といった役があり、練習をおこなって祭り当日に活躍している。そこには練習をみる指導者の大人がいて、当人も昔、子ども時代に先の役を担っている。そして年齢が上がると実行委員会で役を持つようになる。こうして育てられたものが、育てる側になり、そして責任者になるというタテのつながりがある。この過程は先ほどの正統的周辺参加論、また子どもたちの参画のはしご論にぴったり当てはまっている。

しかし中学生以上になると、祭りに係る人間が次第に減ってくる。このことは祭りに限



らず、地域活動全般に当てはまる。実際に、中学生以降は次第に地域社会から疎遠になることは、調査参加学生の経験からも肯けることであった。

このようにみれば、上記の「①活動に参加しながら、年齢が上の者を自らのロールモデルとして意識し、育っていくこと」を読み取れる実践事例がS地区にもあることになる。こういう活動の方法論を他の活動にも活かしていくことがこれからの課題であろう。また参加志向のある若者に対して、参加しやすい条件をどう設計するかが重要である。

## (2)大人の係わり

では大人の地域社会への係わりはどのようなのだろうか。アンケートからは次のような結果が出ている。まちづくりへの関心は 66.9%がもっている（「非常にある」＋「ある程度ある」、表3）。また委員会に係る行事の企画・運営への参加については、60.3%が参加志向をもっている（「参加したい」＋「条件があれば参加したい」、表4）。これらの層は、図4に照らせば、リーダー層、協力層、興味・関心層に該当するといえよう<sup>10)</sup>。とくに後継者づくり、担い手づくりという委員会の課題からすれば、行事の企画・運営への参加志向をもつ層が働きかけの対象になる。若者世代の場合と同じように、参加のための条件をいかにつくりだしていくかが課題である。

表3 まちづくりへの関心（大人）

|                      |        |    |       |
|----------------------|--------|----|-------|
| まちづくり<br>への関心<br>がある | 非常にある  | 10 | 9.4%  |
|                      | ある程度ある | 61 | 57.5% |
|                      | あまりない  | 24 | 22.6% |
|                      | 全くない   | 2  | 1.9%  |
|                      | 無回答    | 9  | 8.5%  |

表4 企画運営への参加（大人）

|                                |         |    |       |
|--------------------------------|---------|----|-------|
| 委員会に係<br>る行事の企<br>画・運営への<br>参加 | 参加したい   | 3  | 2.8%  |
|                                | 条件があれば  | 61 | 57.5% |
|                                | 参加したくない | 29 | 27.4% |
|                                | 無回答     | 13 | 12.3% |

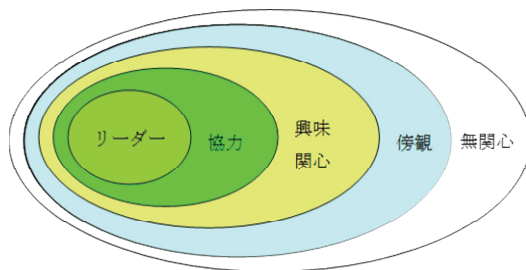


図4 住民の構成

## 5. 関心から参加へ

### (1) 多世代協働の事業

ではどのようにして関心を参加へとつなげることができるのだろうか。見直し作業の中で挙がってきたことは、大きく分けて三つあった。第一は多世代協働の事業の実施である。第4回ワークショップでは三つの参加、つまり①様々な世代が参加しやすいもの、②若者世代が企画・運営できるもの、③PTA役員が企画・運営できるものとして、表5のよう

地域協働と担い手育成 (3)

に意見がでた。ただしそれらはワークショップ参加者の「できるだろうという」思いであり、実際にどう実現していくかが示される必要がある。

表 5 多世代協働が可能な取り組み

|  |                                |
|--|--------------------------------|
| ①様々な世代が参加しやすい  | 安心・安全マップの見直し、子ども事業、語り部の会など     |
| ②若い世代が企画・運営できる   | 八畳岩の登山、子ども事業、安心・安全マップの見直しなど    |
| ③PTAが企画・運営できる  | 安心・安全マップの見直し、子ども事業、エクスプレスの発行など |
| (候補)   |                                |
| 八畳岩の登山。エクスプレスの発行。安心・安全マップの見直し。子ども事業(わたがしコーナー、子どもまつり、星空映画会もちつき大会)。語り部の会。観光ガイド・歴史マップ |                                |

(第 4 回ワークショップより)

(2)参加しやすい方法

そこで第二に、参加を促す方法についてである。これには二つのことが挙げた。まずメディアである。報告会の参加者からは「事業をしらなかった」という声が多く挙がっていた。アンケートでも、表 6 のように、あまり委員会の広報誌（「エクスプレス」）が用いられていないことが示されている。次期計画では中学生のライターを入れるという案が出ている。

次にクチコミである。表 7 にあるように、アンケートでも参加しやすい条件として「よく知った人と参加」が挙がっていた。信頼できる人たちの間で流れるクチコミ圏に入ることができると、他の人も参加するということになる。そういったオピニオンリーダーといかに接点をもつかが重要になる。

例えば P T A との接点である。小学校 P T A が優良 P T A 文部科学大臣表彰を受けたが、それには地域と一緒にあった見守り活動があった。これはコミュニティの C を加えた P T C A 活動への展開と考えられるだろう。

表 6 情報入手手段 (複数回答)

|             |              |    |       |
|-------------|--------------|----|-------|
| 情報入手<br>の手段 | 市政だより        | 68 | 64.2% |
|             | 公民館だより       | 11 | 10.4% |
|             | まちづくり委員会の広報誌 | 18 | 17.0% |
|             | 呉市のHP        | 1  | 0.9%  |
|             | テレビ広報        | 1  | 0.9%  |
|             | 地域の掲示板       | 29 | 27.4% |
|             | 回覧板          | 62 | 58.5% |
|             | 人づて          | 28 | 26.4% |
|             | その他          | 4  | 3.8%  |

表 7 参加しやすい条件 (複数回答)

|              |            |    |       |
|--------------|------------|----|-------|
| 参加しやすい<br>条件 | よく知った人と参加  | 25 | 23.6% |
|              | 都合にあわせて    | 46 | 43.4% |
|              | 趣味・特技が活かせる | 13 | 12.3% |
|              | 詳しく知る      | 9  | 8.5%  |
|              | 体験的にしる機会   | 2  | 1.9%  |
|              | 専門知識       | 4  | 3.8%  |
|              | 使命感        | 4  | 3.8%  |
|              | 地域の人から感謝   | 9  | 8.5%  |
|              | その他        | 2  | 1.9%  |
|              | 特になし       | 7  | 6.6%  |

(3) 中学生、中学校、P T A との連携

図 5 の空白の部分が、それぞれ P T A、若者世代の参画で埋まると、タテのつながりが

できることになる。結論として、計画改定部会はタテのつながりを生む場をつくるために、中学生、中学校、PTAへ呼びかける（クチコミ）ことにした。担い手は活動の中で成長することが基本である。中学生を広報誌のライターに迎えるのもその一つである。周りには大人がいる。また中学校の理解も必要である。部活に忙しいのが中学生である。さらにPTAの方の理解も必要であろう。まちづくり委員会のメンバーは喜んでサポートするだろう。具体的にはこれからであるが、こうして中学生の成長を学校、PTA、地域が共に支援していくという姿が描けるのではないだろうか。

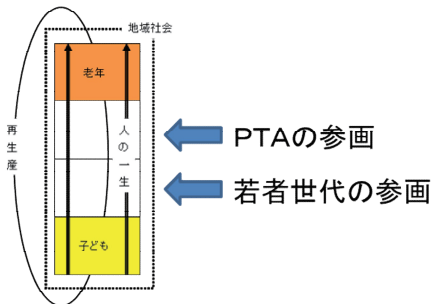


図5 タテのつながりの再構築

もう少し若者世代の参画という点から説明しておきたい。表8に若者世代の参画の類型を挙げた。地域人型というのは、例えば先述の祭りにおけるつながりのことである。しかしこのタイプは少なくなってきた。そこで考えられるのは、協働型である。例えばこれからS地区で行われようとしている連携である。そして最後がボランティア型である。例えば参加学生の係わりが当てはまる。参加学生のような関心をもっている者は地域の外にいるであろう。ただそれへのつながりが必要となる。三つの類型を並べると、多世代協働の進め方としては、地域人型というのが本来の姿であるが、現状ではそのままを再現することは難しい。よって協働型で幹をつくっていき、ボランティア型を補助的に用いるというイメージになろう。

表8 若者世代の参画類型

| 類型      | 育成組織       | 事例                     |
|---------|------------|------------------------|
| 地域人型    | 地域団体       | 祭り<br>ポイント: 先行者との係わり   |
| 協働型     | 地域団体+行政    | 中学生との協働<br>ポイント: 学校の理解 |
| ボランティア型 | 本人の関心・やりがい | 参加学生<br>ポイント: つなぎ      |

6. おわりに～タテにもヨコにも人がつながる

最後に、今回の見直し作業の意義について述べておきたい。第二次計画のキャッチフレーズは「タテにもヨコにも人がつながる」である。今回の見直し作業の性格をよく表現したものになっている。次世代の担い手を育成することの確認から始まった見直し作業は、中学生、中学校、PTAとの連携という戦略に帰結した。

S地区の参加の現状では、第一に若者世代の参加志向は相応にあった。また参加の事例もあった。よって参加を促すような取り組みが求められた。

第二に大人の係わりでは、現状のまちづくりの活動層である高齢層と、子ども育成団体

### 地域協働と担い手育成 (3)

の活動層である世代がつながっていない状態であった。しかし参加への関心はあり、同様に、参加を促す取り組みが求められた。

第三にこの参加を促す取り組みについては、多世代協働の事業、参加しやすい方法、そしてタテの空白を埋めるための中学生、中学校、PTAとの連携という方向性が示された。

本来まちづくりは総合的なものであり、行政・専門機関と住民が協働して行うものである。その意味で地域協働はまちづくりのメインストリームであろう。そして担い手育成は多くの取り組みが逢着している課題である。S地区の取り組みは解決の一つの方向を示していると考えられる。

見直された計画の実践及びその結果については今後ということになるが、地域協働の精神が生かされた取り組みがなされることを期待したい。

### 付記

本研究は 2014 年度の呉地域オープンカレッジネットワーク会議の地域活性化研究助成金を受け、『多世代協働によるまちづくりの推進～呉市中心市街地を事例に～』と題して行ったものである。本稿は同研究報告書の内容に加筆して作成した。研究に当たっては広島文化学園大学社会情報学部健康福祉学科の学生（藤本有希、森山希望、宮岡優斗）、同僚（鶴岡和幸、栗川隆宏）と共同して行った。よって本稿は共同の成果物である。また調査に当たっては、S地区の関係者の方々、呉市の職員の方々に多大のご協力を頂いた。ご協力頂いた方々に深く感謝したい。

### 注

- 1) 大藤文夫、2009、地域協働と担い手育成－呉市S地区における地区まちづくり計画策定を事例に－、社会情報学研究 Vol. 15、pp. 1-11。
- 2) ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、1993、状況に埋め込まれた学習－正統的周辺参加－、佐伯胖訳、産業図書。
- 3) ロジャー・ハート、2000、子どもの参画－コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際、木下勇他監修、萌文社。
- 4) 大藤文夫、2011、地域協働と担い手育成(2)、広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報 Vol. 7、pp. 6-7。
- 5) 藤沢市社会教育委員会、2014、子ども・若者の地域参画を促進するための社会教育における協働－藤沢を担う子ども・若者の地域参画とそれを支える人材育成－。
- 6) 地区内で比較的若い層が居住する二つの自治会の世帯を対象に行った。各世帯の大人一人、中学生・高校生・大学生がいれば全てに記入をお願いした。アンケート票の配布と回収は自治会長をお願いした。
- 7) 斎藤嘉孝、2010、子どもを伸ばす世代間交流－子どもをあらゆる世代とすごさせよう、勉強出版、pp. 68-72。
- 8) 大宮登、2006、若者と地域づくり、月刊地域づくり 第 205 号、地域活性化センター。

- 9) 汐見稔幸、2010、汐見稔幸ほか編著、世代間交流学の創造、あけび書房、p. 8。
- 10) まちづくりへの関心という点から住民の構成を示した図である。鶴岡和幸・大藤文夫、2010、地域福祉の担い手形成、広島文化学園大学ネットワーク社会研究センター研究年報 Vol. 6、p. 15。